

4571

146
588

露

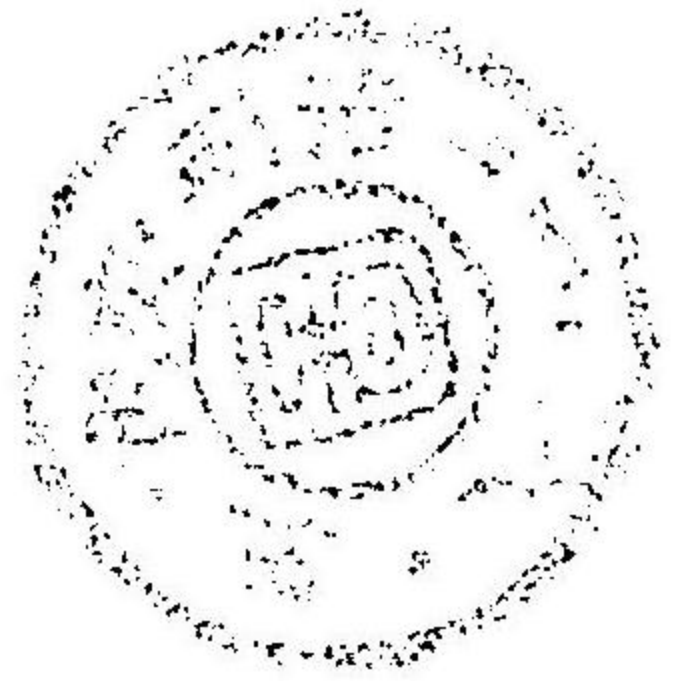


特64  
217

岩野泡鳴著

雲路

無天詩會藏版





草の葉にはかなく消ゆる露じもを

かたみに置きて秋の行くらん

金葉集



(1)

露  
と  
も

秋の蜻蛉に寄す。

岩野泡鳴著

この世の塵に染まされば、  
もとよりぬぐふ肌あらず、  
人のあやみを知らざるに、  
敢て負ふべきおも荷あし。

濁りて成りし荒がねの  
土に思ひの根は絶えて、



あめも開けぬそのかみの  
聖き御靈みたまを分けにけん。

瑞籬みづせき古りし御やしらの  
鏡にうつる舞のどと、  
ゆかしくまどふ羽衣の  
いで立かるき身されども。

天津乙女の下る時  
ふるてふ花の樂がくもさく、  
南の岸に變へんすべき  
龍女が玉の光見ず。

來たるに聲を立てざれば、  
いづくの客きやくかわき難く、  
去るに跡をも止めねば、  
その行ふをば誰か知る。

あるはいろ濃き朝雲の  
ちぎれて浮ぶ片端に、  
神のい吹ふきをふき入れて、  
かはりつゝある御使か。

あるは夕べの黒幕を  
四の羽がひに明け持ちて、

次第く引き延ばす。  
あまの魔<sup>ま</sup>じ物あるべきか。

いさ穂につとふ小雀の  
いとあみ繁き、日のかげを  
「時」の車のめぐるごと、  
そふ打つ音も聴かなくに。  
さびしき庭のおもてをば、  
小春のひよりのとやかに、  
その飛ふけしきあがめては、  
形ありともおもはねず。

世のものあふば、おのが身の  
うつり易さを憂ひつゝ、  
木の葉枯れ行く秋の日の  
深きあはれの見ゆべきに。  
心の色のあさがごと、  
さして悲み顯れず。  
猛きうまれの人にせば、  
その一生をあやまりて。  
胸にかゝりしおは船の  
たのみ綱をたち切りつ。



古き衣を脱ぎ棄てよ、  
深山の奥に入りしかど。

あふたの希望さはめ得て、  
浮世の關を越え來たり、  
目には見ぬぬどありぎぬの  
寶をつたへ弘むふん。

さはさりあがふ、墨染の  
かをり妙あるさぬにさへ、  
身をしる雨は降るものぞ、  
そもや如何あるこのひじり。

高ささどりの力もて  
無色の天を身に越えつ、  
二萬由旬の底までも  
暗き迷を開きけん。

夢路の如くすき透る  
あやの真袖のゆるやかに、  
昔を悔ゆる人間の  
涙のあとに絶えて無し。

天津御國の樂みの  
たましく爰にまぎれ來て、

肌はだあたゝかのみ光に  
姿を見せしさまあれば。

きよく輝く小胸には、  
うぶみ疑ひ結ばれず。

その麗はしき面影は、  
乙女の戀も及ばじよ。

ゆふべ誓ひし兼言かねごとも、

けさの別れにのぞみては、  
千里せんりを隔つうつせみの、

こゝろもとあさばかりかは。

たゞ假の世の御空には、

うつろふかげぞ常あるを。

如何にまことの星ありて、  
そのふるまひを乱さる。

かれは身づかふ答ふらん、

是れ正まさしくも、始まち

終まちある大神の、

言葉に結ぶ爲ためありと。

さばれ、貴ときあきつ羽はよ。

あが身の如く、生き死しの



狭き限りをのがれ出で、  
無言の道をいたさきは、

かきたこきたに往きかひの  
羽根もわづかに一もん字、  
嘗てせまふぬいきほひに  
とこ世の秋もふるふん。



湖上を

渡り艱みし  
蜻蛉に寄す。

昔あがふの琵琶の海、  
浪平ふかに風和ぎて、  
治まる御世の面影を  
天に向つて示せども、  
青き底あるうろくづに  
菱の綱目の追ふごと。

しげき悲みまつはりて、  
渡り兼しか水とんぼ。

水より出でし物にして、  
その水故に艱なやむとは、  
世に生れ來こし人々の  
この世苦む如くにて、  
會あひとき釋迦が御教の  
約束ごとか、如何あれば、  
淺瀬の草を飛びかはで、  
この太わだに溺れけん。

比叡の御山は西にあり、  
近江の富士はその東、  
周圍まわり七十五六里の  
岸邊は遠きたれ中や、  
斯る深みをいち葉はの  
浮べる舟に流れ來て、  
わが持つ權ごんのその端に  
とまりしこそ哀れあれ。

羅綾らりょうの羽根を傾けて、  
いとゞ重げに思はれつ。  
肩より浴あびし白露を



ふり拂ふべき力あし。  
しり尾引きつゝわが權を  
傳ひてのぼるその様の、  
つかれ果てゝやしはくど。  
あゝ、是れ、何の使ぞや。

口は同じく戸ざせども、  
色にうれひの響あり。  
姿は之も變ふねど、  
樂しき戀の光あし。  
されば見よ、わが大覺の  
ひじりの歩みあふはれず、

あめ 乙女子 柳より 願ひ  
星ありとしも思はぬす。

狭き限りに限られて  
安きを得ざるものゝごと。  
かれ一文字のいきほひは、  
之には折れて二と成りつ。  
三界衆苦、日の影の  
西に散ふけし夕ばねや、  
小胸を開くすい風に  
漸くいさをつぎにけん。

羽根を動かさし、尾を振ひ、  
 首をめぐらし、足を擧げ、  
 勢多の川べにうつ蟬の  
 殻脱ぎ棄てしけしきもて、  
 まどへる露をふり落し、  
 既に絶えにし玉の緒の  
 いき返りたること地して、  
 いづくともなく飛び去りぬ。  
 あゝ、是れ、何の使ぞや、  
 一いの聲いを残しけり。  
 聴けや、われこの十餘年

相尋ねぬし友垣の、  
 いつしか父を失ひつ、  
 兄はあれども、母あれど、  
 その身にすべて引き受けて、  
 をみちの腕をかこつあり。  
 花のあしたに世の子は  
 晴れのころもを競へども、  
 月の夕べに人妻は  
 静けさいんを明けども、  
 ささけの綱つなにつかかれて  
 涙の淵に沈む身は、



身づからこころ勵まして  
浮びし出でん甲斐を無み。

柳の糸のつきまぐも

いさながふふるそのいのち。

絶ゆるを待てど、さりとは、

頼るべき權のまかふめや。

かれ復また細き筆 噛みて

はかあき事、をいひ越せば、

われあきつ羽の御告もて、

「神に頼れ」と答へあん。

嬰兒生誕の聲を聽て。

無明の風にさそわれて、

たま〜生れ落ちにけむ

木の實と見れど、飽き足らず。

萬物朽ちて、岩つきの

またわか返へるものまふば、

魂たまてふつるにつまがれて。

あはれ、静けさあめ地の

母をこびてや、おのづから

浮世のこゑを泣き叫ぶ。

限りある身のふどころは

塵よりありしものあれば、

さほあたふかくあふざりや。

乳房によせて、をささずを

いなく心の絶えぐに、

ささけはもるゝこゝ地して。

愛にかさしむ人の手を

はあれて、しばしねふる間も、

わがふる里やゆめ見けむ。

玉のかんばせ麗はしく

含めるゑみのあひだより、

あまつ光のかゝやまて。

まくらを守るみつかひの

羽ひろもうすさかひさへも、

見ゆやすくらむそのままこ。

さよきうちこそなちまれば、

世のありさまのうつりあは

いく多の迷ひれ来り。

よしあししびき道なきの



つゆ 踏みわくる 苦みに、  
刹那 刹那を 生き死をむ。

あはれ、をさあ子、われもまた、  
嘗て 汝がどとわか草の  
つみあさ 芽はぬありけむを。

心ばかりもはびこりて、  
拂ふへどまどふつたかつと、  
その根は深くつゝまれつ。

おもひの家 にこもる身の  
鳴かぬかふすの 聲さけば、

生れぬ先きの 戀しさを。

おきそにつあぐ玉の緒の  
あがき短きわかちあぐ、  
まこと一つを血すぢとし。

假りのかたちを 顯はして、  
月日に 浮ぶ芭蕉葉の  
もろきは 人の子あるふむ。

## 亡兒の寫真に題す。

その輝けるまゝここには  
清き油を湛へつゝ、

呼べはこゝろたしふり向きて  
緑の玉の動くふん。

あゝ、さりあがふ、空蟬の

世をうらうへに隔てよば、

これも昔の名残にて、

空しく似たる母はあり。

その麗はしき口びるは

千代の春をば含みつゝ、

抱けば上し仰ぎ見て

ゑみの花びふこぼれあん。

あゝ、さりあがふ、幽明の

へだて一たび生じては、

これも常なき歎きにて、

かたのみ似たる父はあり。

すべて兒といひ、親といひ、

もとはあめ地二つあゝ、



人の心を貫ける  
誠まこと一つを血筋ちすぢにて。

あるは先ち、あるは又、  
後れてこゝに生れ來つ、  
假かりのゑにしのたまくに  
斯る名を得しものなれば。

一夜よのあふし聲もあふ  
見ぬ使ひにさそわれて、  
その別れ行くあと先も  
會て定ままるものなふじ。

あふ、さりあがふ、彼は去り、  
われは残りてあるものを。  
よみの境さかいをいつこまで  
この悲は限るふん。

静けき花のあしたには  
もろき浮世のかこたれて、  
散りにし時の姿をば  
無常の風に恐びつゝ。

さびしき雪のゆふべには  
その優やさしさの思はれて、

あどなき魂の行るをば  
小暗き空に追ひ迷ひ。

清き月夜のあかりには

した邊の旅の目に見えて、

三途の川の淺瀬をば

渡りあやめる稚見しあり。

噫、春は憂しとも過ぎ行かん。

噫、秋はつくくも移りまん。

かしてに至るそれ迄は、

如何でか盡さんこの思。

夢には遠き影とあり、

うつきは近き繪とありて、

二つの世をばあかばより

結び合はする寫真かま。

われ嬰兒生誕の聲を聽て「人の子」なる詩を作り、曾て之を某新聞の新年附録に載す。即ち前詩なり。後二年にして此挽歌を誦する悲境に落つ。こはわが病中になりしもの。床上身づから聲をわけて通韻を試むるを數回、而して一回は一回毎に嗚咽の甚しきを覺ゆるに終る。われに悲戀の詩あり又煩悶の歌あり。或は浮薄人情の頼むべからざるを歎じ、或は天地無限の知り難きを悲む然れども、斯の如く我をして泣かしめしものは非らざるなり。嗚呼、兒、去つて何處にある。空しく二年二ヶ月の思無耶相を止むるのみ。



三歳の南天。

(をんなに代りて詠める)

三とせこのかたわが夢に  
 ひとしは深きその人の、  
 世にもやさしきおもかけは  
 このおくつきにうづもれて。  
 かしこのかたに立つ石の  
 いく夜の雨にうたれてや、  
 しめりがちあるその根をば  
 みどりの苔はおほへども。

あはれ、ゆかしきさを鹿の  
 耳ふり立てよ聴きまさは、  
 今も同じきわが戀の  
 かすかさがふも通じてむ。  
 よしや口には得ぞいはぬ  
 この悲みの一ふしも、  
 かわらぬ身をば訴ふる  
 わがこと靈の聲をれば。  
 あゝ、假そののこたへだに  
 傳へて爰にあふばこそ。

つき日の駒のあがきにも  
心残りはこればかり。

いのちと頼む君ゆゑに

忍ぶ思のたけをしも、

胸にたゞせて疊たませて、

隠し置きてしわが晴はれ着ぎ。

つひに着かざす折あくて、

過ぎにし君がかたみかも。

いかにわが身にをさめよと、

いまはの一めたまひけむ。

たどひ互ひの言葉こそ

ちぎり交はさぬあかあれど、

死でのたび路のみちづれの

かげとやわれを見たまひし。

あるは足ふはぬわが身をば

ま一度教へたまはむと、

よみの使ひのみそばまで

招きやしけむ、ぬもどろに。

たもち兼たる涙より

わが目うるみしそのひまに、



君はいつしか默然と  
この世のいさを引き取りぬ。

こゝろ残りはこればかり、  
君がみむねも聴かきくに。  
はかき占うらを南天の  
種一つぶにためし見つ。

「わが身にいたくねぎ事の  
まことかきひてあるまふは、  
三世の友をおもひ寐ねに  
きみは眠ふりて居たまはら。

「わが蒔く種たねのもねいでよ  
二つのねだに分れよ」と、  
み足のかたのつち掘りて  
うづめしこともあたまりき。

木は年毎にかひ立てど、  
わかれぬ幹たねの一すぢに  
わが玉の緒どほそり行き、  
實をも結ばむちかふまし。

たゞうれはしき迷ひのみ  
いや増す根どは且かつ知れど、

抜くにもたへぬわがおもひ、  
昔をひとへの冥途かき。

蜘蛛、蜂、少女。

栗の下かげすぎぐに  
うつり縮みて、飼牛の  
あへぎもせまる晝の日や。  
ひかり烈しき庭の面、  
むしろにもゆる干梅の  
にはひもいとと曇くして。

南の風のしめりさへ  
蒸しのぼりけん、音あくに、  
あをき草葉のおのづから  
うちうを垂れし軒端には、  
呉のはとりか、さゝがにの  
細き糸をばかけ渡し。  
千重に八千重にたて横の  
ひかるあや絹肌すまて、  
すいしき空にやどる身の  
いとも妙あるたくみをば、  
わがあめ地の着くだせる



みぞの裾ともあがめてん。

爰に、たまぐ、一匹の

蜂は鳴きつゝ飛び來たり、

いがきの端に捕はれつ。

かもひ設けぬわざはひを

避くるとすとも、あかくに、

その羽も足も紅動かま。

このありさまを見すまして、

蜘蛛は忽ち飛びかゝり、

待ちし紅じきを食ふはんと

こゝろばかりはあせれども、

敵のちかとの強くして

互ひに競ふから負けや。

その數いまだ何れども

わから兼ねたるまのあたり、

一もみ揉みしはずみにて

蜂のまわ目の解けにけん、

うちりの聲も苦しげに、

いのちかゝへて逃れけり。

小蜘蛛はひとり残されて、

おそれの淵にのぞむふむ。  
 高きわが巢を定めちく  
 はせめぐりてしその末に、  
 わふたの糸をつりさげて、  
 そで垣近く舞ひ下たり。  
 折しも、清き小娘が  
 手洗ふ水のしづくにて、  
 苔さへ深くうるほひし  
 つは蔭かげの根をよぢのぼり、  
 その葉ぞまろきはとりより  
 蓑虫あまむしのごと捲まき閉とぢつ。

かのれ身づかふうつゆふの  
 之に籠りし程もちく、  
 かの熊蜂は一むれの  
 徒者たさを伴ひもり返へし、  
 もとの軒端をさまよへど、  
 ぬしちき網の懸かるのみ。  
 かすかにのべし玉の緒の  
 一すぢ残るつたひ来て、  
 かしこき仇の隠れ家かづを  
 よりてたかりてつき刺しつ。  
 今日けふの恨みは晴れし空、



勝どきあけて飛び去りぬ。

手摺てすぢの少女之を見て、

よろづの主しゆあるおほ神の

めぐみの智慧ちゑや悟りけん。

世にもさかしき口びるの

くれある結ぶあひたより、

るみの花びふこぼれけり。

湖上の月。

三五の空は澄めれども、

長命寺山ながいのてらかげ見ゆす。

月は夜霧をたち籠めて、

魚鱗踊るか浪の上。

湖上に延ぶる鉢はち壺つぼの

先さきかのづかふ退きて、

押せる櫓こしかいの力さへ、

及びがたなきみ光の、

坂漕さかこき登る一葉舟。

客は沈みて喜べば、  
仰ぎて歌ふ船頭の  
聲に憂ひの響あり。

「やよ、船人よ、ちが如く、  
手易きつとめ盡しつゝ、  
尙も悲みあるありや。

金勝山の林より  
あしたの神をいで迎へ、  
長等の山の谷わひに  
ゆふべの君を送りつゝ、  
晝はあまたの荷を載せて、

膳所や石場にいで來り、  
今はた斯るともし火の  
あかき御空を漕ぎ行きて、  
夜るの酒手を得て歸へる。」

「あゝ、是れ、君が世の外に  
たまさか遊ぶちふばこそ。  
日々に勞るゝわざとして、  
いづれ變はりしことやある。  
まして男の樂みて  
飲む盃も、わが身には、  
甘き味浮ばぬを。」



「たゞ、聞き玉へ。わか家は  
 さる人々のした作り、  
 田の春秋をしきたへの  
 妻にまかせて、おのれのみ  
 三途の婆々の二の前は、  
 わが身にいでし青さびの  
 ぬぐひ難しとあきふめん。  
 もとは知<sup>はな</sup>あり、田もありて、  
 ゆたかあふねど、親々の  
 名をば僅かに傳へつゝ、  
 育て上げたる姉<sup>あね</sup>ひすめ  
 か玉か行きしその先は、

大江五ヶ村勢多の郷、  
 田原藤太が唐橋と  
 共に、名高きばく打ちの  
 かしふと成りて、一たびは、  
 威勢を放つ繩張<sup>なわばり</sup>の  
 廣き子分もありしかど、  
 不義の富貴は浮き雲の  
 ためしに漏れでーげに、あはれ。  
 「一夜烈しき戦ひに  
 その身代の比叡おろし、  
 あふゆる物を傾けて

浮ぶ瀬さくにありしかば、  
 子ゆゑの闇にわればかり  
 先祖の田をば賣り拂ひ、  
 その重される負債をば  
 免れしめしも、恩は仇—  
 別にをんちを手に入れて、  
 われ等の子を かへり見ず。

「いづれ斯くある悪性の  
 常とし知ればゆるさじを。  
 悔むこそ、尙、おろかきれ。  
 姉は三人の兒を連れて

歸り來りぬ。さあきだに、  
 家に老父母、子、孫の  
 やかたを如何で養はん。  
 五反の小作刈り入の  
 俵を分つ四分六分、  
 多きを貰ぐそのあとの  
 好かふぬ年は、尙更ふよ。  
 常の不足は神領の  
 二座に祈りて満さんと、  
 冬より春の働さも、  
 櫓かいの手わざまゝあふす。

「かくもいとあき秋の日に



湖水の上に浮ぶとも、  
 われは綾あすさゝ波の  
 碎けて散らふ月のかけ、  
 風にゆれずば、うへしたに、  
 家根ちく澄める御やしろの  
 あかしとも見ん。さりあがふ、  
 浮世の心動きては、  
 今は昔のしき浪に  
 苦しき末の細りつゝ、  
 われふが圓きたましひは  
 いくつくも放たれて、  
 隔り出づるとあやまたれ、

氣を取り直す一筋も、  
 底の暗さに振ひつゝ、  
 螺旋の如く燃え去りて、  
 残る六字の名號を  
 水に念する安心も、  
 立つるひまなき唐錦、  
 綾の錦の輝きの  
 至る所に先立ちて、  
 わが身をまどふ不思議さは  
 妻子可愛きころかあ。」

「あゝ、いふ勿れ、船人よ。」

再び語ること勿れ。  
 けふのかのれをいそしみて  
 うへ見ぬさまの宜<sup>よ</sup>かれや。  
 秋のけしきは盡くるとも、  
 ちれは一種<sup>いっしゆ</sup>の光あり。」

\* \* \* \* \*

その夜、伏戸<sup>ふしど</sup>に入りて後、  
 夢に御空の月を見ず、  
 輝くものはさゝ波の  
 碎けて散ふ影ありき。

(1) 秀郷勢多の橋に大蟻塚を退せしを以て名あり。  
 (2) 神領村に建部神社あり二座に分る。

孤兒。

都の空を飛びかよふ  
 鳶<sup>とび</sup>も鳥も、すみ染の  
 寐ぐふ求めて鳴き歸へる。  
 芝の御山の森かげや。  
 夕日の名残といめけん  
 木々の樹するの色づきて、  
 錦をかざす間<sup>あひだ</sup>より  
 五重の塔を見るあたり。



往き來の人も手車も  
急ぎて過ぐる道のべに、  
樂しき小供一むれの  
時を忘れて遊ぶあり。

かのく猛きつは者の  
姿をよそふその身には、  
つるぎ、外套、ランドセル、  
玉も薬も備へねど、

竹の火筒を横たへて  
旅のつかれか癒すふん、

あまた散り布く葉の上の  
こゝにかしこに憩ひしが、

士官の叫ぶ一聲に  
すべては勢をうち揃へ、  
「進め」の合圖もろ共に  
曲れる坂を下り行く。

\* \* \* \* \*

右には高さ石垣の  
堀をへだてて立ちつゝき、  
左は低き山の根の  
墓場の末を塚にて、

人馬來去の中みちを  
二つに分つ古いてふ、  
數百年のその幹は

木々の樹するを凌ぎつゝ。

光さへぎる大枝の

茂きかれ葉はかのづかふ、

雨に先だつ蝶のこど、

ひゞく舞ひて下るあり。

\* \* \* \* \*

かの一隊のわふはべの、

喇叭の音に吹きつれて、

あきみ正しく右ひたり、

この木のもとを進む時。

熟して落つる銀杏の

三つ四つ二つ見てしかば、

太郎三郎留吉は

われ後れじと奪ひ合ひ。

おちじ味方の戦に、

のゝしるあれば、泣くありて、

賽の河原に鬼の子の

餌じき争ふさまありき。



折しも、茲に、おいふくの  
孫をたづねて來りけん、  
杖つきかへて、右の手に  
いとも悪しきをつれ行けば。

次に來りしはした女は、  
軍服衣たる兒を呼びて、

「とく歸りませ、母上の  
招き玉ふ」と、引き去りぬ。

兄ある者は又曰く、

「來れ、弟、衣手の

汝が手のうちをうち拂ひ、  
ゆふげの席に列ふん。」

遊び敵は悉く

おのが家路につきしかど、

寂しきまゝに居残るが、  
つぶれし實をば拾ひ上げ、

あたり靜に夕暮の

せまるも知ふず、唯ひとり、

高さ小枝を仰ぎつゝ、

風のたよりし待てるあり。

## 夕立の歌。

その姿をばあふがねの  
 地中に深くひそめつゝ、  
 千里二千里一瞬しゅんの  
 風と雲とを待てりてふ、  
 わが雷獸よ、いざ覺さめて、  
 このあめ地の戦を  
 來り迎へよ。來り見よ。

あはれ、そのかみ、唐土たうどの

草木もあびき伏しにけん、

始皇が御狩あふあくに、

あをき幕屋まくやを張る空の

一天俄にかき曇り、

風の足あしより刈り菰こもの

乱れを降ふす夕立や、

大雨たいうは盆ぼんをくつ返し、

小犬とまどふ西東にしとう、

ゆきゝの人ひとはころも手の

ひび笠あげて、わが家やへと

いそぎ歸りしちまたをば、

奈落の底ゆ堀りあばき、



縦横<sup>たてよこ</sup>むじん、いさづまの  
 鋭きつるぎひふめきて、  
 やみを貫くその光。  
 左にくぢけ、右に折れ、  
 自由自在のいきはひを、  
 敵と味かたに千よろづの  
 森羅萬象たち分れ、  
 ふとき合圖の度毎に  
 宇宙は消ぬつ現はれつ。  
 芭蕉裂けたる北庭の  
 窓を開いてあがむれば、  
 立て竿<sup>さき</sup>あふぬうつせみの

人の心ものび縮み。

恰も神の箕<sup>み</sup>を以て

打ち場の麥穗<sup>あひ</sup>蹴るがごと、

善悪正邪かのづかふ

ところを分つこゝ地して。

思ひ起せば、その昔、

イスレル人がことさへぐ

エジプトの地をのがれ出で、

三月の旅をたゝかひの

山川越ねて、真草刈る

シナイの荒野さまよふや、

山のふもとに陣を張り、  
 きよき境しかしこみて  
 三日三夜さの御拔しつ。  
 振旅閼々、静肅の  
 氣にみち満てる間より、  
 モウゼはひとり玉かつふ  
 エホバのもとによぢ登り、  
 萬古に垂るゝ石ぶみの  
 十のかきてを賜ふ時。  
 山のいたゞき火を出し、  
 あつき煙は焚木こる  
 かまどの如く立のぼり、

喇叭の音にあふがねの  
 地のもどゐも震ひけん、  
 その有様をまのあたり  
 われは見るかき、この夕。  
 蓋し常なき人の世は、  
 一起一滅、いかづちの  
 ひふめく聲にうち靡く、  
 草葉の露に似たりけり。  
 まこと此世にどこしへの  
 神の御救ひあかりせば、  
 まよひに迷ふわが魂は



草葉にかける露にして、  
 てん地をかける夕立の  
 たゞ一鳴りにゆり落ちん。  
 見よや、こなたに電光の  
 おかり廣がるおもてより、  
 すがたかき消す飛龍あり、  
 かたのあつき雲間には、  
 萬弩を隠す石火矢の  
 ねふひ正しきかけ見ゆ。  
 といろくと鳴神の  
 心の中にひいては、  
 胸にかゝれる黒幕も

そのまゝかより引き裂けて、  
 シオンの宮の御壇より  
 あまの御門にのぼり行く、  
 いのりの如く聴かれつゝ。  
 おそれかしこむ萬物の  
 居すまひ更に整ひて、  
 光をさむる久方の  
 あめ地もとに返りあは、  
 重きこだまもおのづかふ  
 そのいきほひを和らげつ、  
 やゝに消え行く白妙の  
 雲より雲にといろさて、

常世の國にや到りけん。

悲哀の人を慰むる辭。

あはれ、わが世に空蟬の  
 はかたき戀を珍めづらしみ、  
 遠く見は透く青雲の  
 あふぬ望をたのみつと、  
 空しく抱いだくあふ玉の  
 年に誇りし人々よ。  
 あしたの野邊にむふ鳥の

飛び立つ跡を踏み迷ひ、  
 夕べの空に星影の  
 きふめく見ては足あし惑まよひ、  
 その日その日の刻ときまるく  
 刹那を忘れ狂へども、  
 春の花かけおぼろげに  
 あが組み立つる哲學は、  
 無心に浮ぶ夏雲の  
 峰と碎けて消きえ失うせつ。  
 秋の草葉にかく露の  
 情なさけけを語る友は、又、  
 橋の林に冬枯の



風ともろ共遠ざかり。  
 頭上ツシヨウをめぐる月と日の  
 ちまたに立ちてうそふけば、  
 おのがよろこぶ説セツさへも  
 既にあふたのものをあふす。  
 むかし戀せし乙女子も  
 人に嫁ぎて、且は又、  
 その手にゑめるまゝ子あり。  
 ひどりさすふふ「ひむがしの  
 野にかざろひの立つ見ぬて、  
 かへり見すれば」傾ける  
 月を悲むころること、

やがてわが身の上にして、  
 行ふ定めぬ雲水の  
 翁と共に「爐カマびふきや、  
 左官」の髪に「老い」を泣なき。  
 遂におのれを焼やき太刀たちの  
 貴とき時は失せ去りて、  
 如何に悔ゆとも、玉くしげ  
 再び矯めんすべふくに、  
 おのが愚かど世の中を  
 歎きて向ふます鏡、  
 のぞみを盗ぬひまがつみの  
 死しに欺たぶかれざらん爲め、

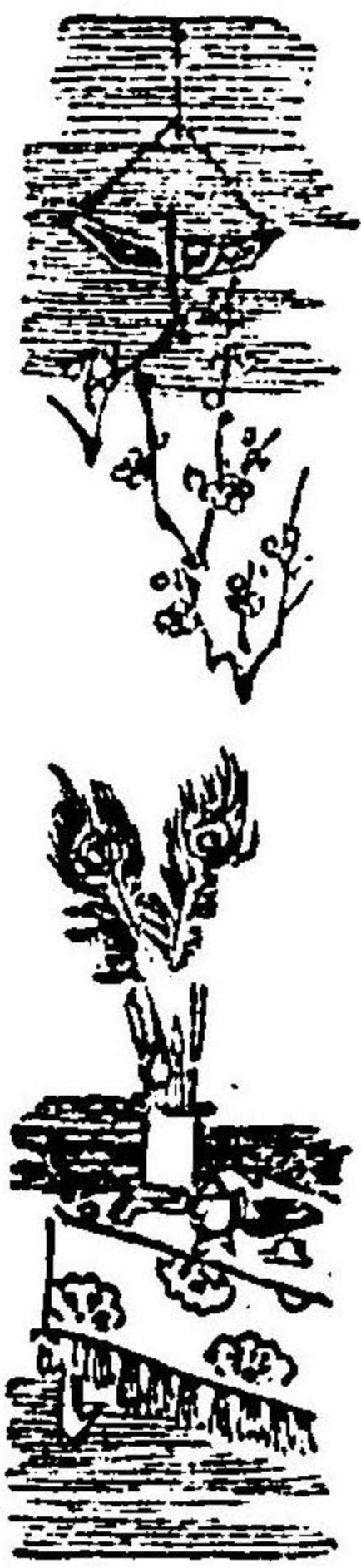
あゝ、わが友よ、心して  
 憂ひにふけること勿れ。  
 生とし生ける萬物に  
 如何で悲みあかるべき。  
 かさしみあふば、之が爲め  
 切り開くべき道ありて、  
 その高ければ高き程  
 踏み破るべき坂多し。  
 されば、常あきこの世界、  
 われとま近くまじはりの  
 刹那刹那を輪に結び、  
 流轉の鎖つぎ合せ、

之に縋りてたましひの  
 かたきあし場をよぢ登れ。  
 狐疑落膽の岩間より  
 眼下に見へん、海原の  
 末に廣がるあが思ひ、  
 かすみ隔てゝ玉の緒の  
 細くありとも、「朝びふき  
 漕ぎ行く舟の跡」あふで、  
 沖の潮風潮さるゐの  
 亂れ横ざる一筋や。  
 誠ある身の憂き事は、  
 雲井の如く、「夕暮の



鐘にうづ捲くひいきあり。  
 あはれ、わが友、あめ地の  
 かすむ中より夢さめて、  
 心の耳を傾けよ。  
 浮世は假の筈やどり、  
 小雨ぞ過ぐる音にさへ  
 合歡木の若葉は破れつゝ  
 安さを得ざるもろ人の  
 こゝろ盡しは、しかすがに、  
 盡きぬいのちに從ひて  
 その勢を呼び返し。  
 窪き場所を大水の

平ふかにするその如く、  
 とこ世の道は報い來て、  
 宇宙に飲くる所をし。



# 十音詩。

十音詩體はわが創始にかゝるもの、十音を以て一行を成し、三三四の誦法を以て之が標準とす。詰める音は音數に入らず、前なる音に呑み込まるゝものも亦然り、二音相合せるは、一音なるを勿論なり。すべて斯の如き場合には、最初の音の外は、片假名を以て記し、その獨立したる音に非ざるを示す。若し然らずして、矢張平假名を用ゐる時は、二音に延べたるものと知るべし。漢語は特別の場合に非ざれば、一語を以て一音に數ふ。韻は、この諸詩の如くかたみに踏ましむるには、二重韻最もその効を奏するに近し。是れも五の句、七の句の外に、一種の新體を試みしもの、未だ世評の如何を知らざる也。

## 富士川。

萬弩をつゝむ夜しづか

富士の雪に明けそめ、

さめし露の朝ゆか

すそ野照らすしのよめ。

千里もあびく白はた、

岸に並ぶ武者源氏。

やがて廻へさ勝さた、

あがれ沈む歩を轉じ。



いさむらくさ二十萬騎  
 よろひの袖さぶく、  
 あふぬ虹も世の歡喜くわんぎ  
 こぞて帯ふる矢ねびふ。

引きそ張りしつよゆみ、  
 いち度たびにとど高たかさ  
 あげばひいく野にうみ、  
 答こたるものはよもの氣

しづみ返る向むかがし、  
 何を敵とたふかは。

馬を下たる岩橋、

きよき川に手洗てあらはし。

ゆみ矢八幡や大菩薩、

わがかぶとに候まをはす。

すべてみ手のわざ待まちつ

きみが都遠みやかふす。

麾下かに從まがますす雄

塵ちりも乱れぬいさほひ、

何なににたとへへ御空みそらを

今いまぞ登のぼる日ひにほひ。

自然。

拂へば散る白つゆ

消ぬ失するにはあらず、

仰ぐそふに神植ゆ

星は根堀すべかず。

雨と下たりて、くれあず

花の色にうつれば、

いと麗はしこの世界、

樂土に浮ぶうを餌ば。

流れ絶ゆるすぎ行く

その影に對する時、

人とは何ぞ、つくづく

去って去ふぬを嘆ず時。

至情は天地をつらみて、

とこしあへど空しさ

自然身づかふ開いて、

とざらせき處戀しさ。



歳  
の  
暮。

歳月サイゲツ 去サッて 又マタ 歸キルス。

この世にまよつわが魂たま、  
二十年ぬふり覺おぼさず、

水は洞ほられてばちやく、

泳およぎこそはやすまね、

やすらうをのとし漁ウロ者モノ、

いはは高たかし秋はね。

故郷の秋。

みやこ遠く立ちいで

歸り來てしふるさと、

ふるさことの思ひで

爰こゝに忍しのぶ橋はしあど。

嘗かつてて千鳥チトリにさそわれ

いづる月のちぶく、

むねも散りし小春こはるがれ

いまに残る木きばしよ。

とほに風晒かまふさるまゝ。  
晴れし露の道へに、

この形骸かたがはをば横たへ、  
笑めば花の口へに、

朽ちば骨の白たへ。

あかば夢をまね習ふ、

暮の鳥かれぐ——

友よ、何をあざ笑ふ、

こわね寒し小あがれ。

落葉。

乾坤寂として、静かに、

ぼん里うごく秋の氣。

神窓にあつて、まさには

人の世を觀する時。

見ぬ聲はかぶく、

肉にひいき足ふはで。

庭のかれ葉はふく、

秋のうとし地獄まで。



數 鶯。

誰<sup>た</sup>が香<sup>か</sup>ありや、うぐひす、

かせかほしくくすぶる、

春のこころ深き巢

おのづかふぞ飛びづる。

自由の鳥よ、あさかふ

鳴きつゝけば、わがこと

かすむ胸も居あがふ

晴れてゆかし軒ぞと。

かろく木より木づたひ、

こゑ嚶々としてめぐるゝ

輪廻を張りしうすふひ、

それも解けて聴ゆる。

ばん法すべてこのねの

時にどもるくごもり。

云<sup>い</sup>へて云<sup>い</sup>へぬあさけの

天地をうたふこの鳥。

野百合。

野すゑに咲く

ひめゆり、

糸も取ふす、

かしがす。

雲井のゆめ

さめがて、

つゆの香かにぞ、

よそほひ。

けさも散るを

いとばで、

かみやまもる、

そのさま。

むさしき物

世に無し、

朽ちて朽ちぬ

一野のゆり。



寐釋迦の渡。

人間有累不可住  
依然離別難爲情

古文桃源圖

音に名高き播州の  
あゆ子さばしる揖保川を、  
龍野の里ゆのぼること  
一里ばかりの川かみや、  
深きふち瀬にかぎろひの  
岩垣高き屏風岩。

何隠くすつむ天工の  
床しきみ手のためしをば、  
之と比べむころも手の  
常陸鹿嶋のかあめ石。  
水戸烈公の世にあふば、  
またも掘りてむ石脈の  
奈落の底ゆ起れりと、  
いひも傳へて來る人の  
氣さへそば立つその形、  
二枚屏風を足引の  
やま根小高き絶頂に  
たふみ上たる奇觀あり。

川をへだてて之とまた  
 ちよめに向ふ城の山は、  
 南北朝のそのむかし  
 赤松うじの據城にて、  
 (けはしき程にあふねども)  
 之を望めば、釋尊の  
 天を仰いでいねたるに  
 さも似たりてふ山ぐみの、  
 小嵐山をかうべとし  
 すばむところを首すぢよ。  
 またひろがりて、川はたに  
 つき出たるは右の肩。

縦一線にかしあべて  
 北につぶある山脈を  
 胴とし見れば横さまに  
 ちよびいでたる山の背は  
 その八枚のあば骨。  
 自然の胸に玉の緒の  
 あひだをささむ谷々は、  
 即ち沈思黙考に  
 肉も落ちてや窪みけむ。  
 之を寐釋迦と呼びあせし  
 その心こそ床しけれ。  
 七日八日の夕月に。



このみすがたの明ふけく  
 川瀬にうつる時はしも、  
 賤がみぢれのさをさして  
 こゝを渡ふむもの皆の、  
 舟をとめてやうしばし  
 合掌すてふこのわたし。

ああ、千早振る人にして  
 見ばや貴とき寐釋迦やま。  
 そのみすがたの渡しをば  
 必ずわたるものとは、

龍野 近在山崎の

姫路にかよふあきうとや、  
 ところの醤油素麵の  
 取り引人は常のこと。  
 日々の旅人しげしとは  
 いふにあふねと、つがの木の  
 いやつぎぐに來たるをば、  
 いとうるさしとかもへとも、  
 之も浮世をわたし守  
 世わたるたつきとあきふめて、  
 柳はみどり、くれさるの  
 花は散りても根に歸へる、  
 あがの春秋よそに見て、

おのが額による波の  
 苦勞を酒に樂しみつ。  
 酔ひの寐迄こに見る夢の  
 まださめやふぬおほ空や、  
 屏風岩よりあけそめて、  
 けふもおちの時刻じときより  
 手に取りあげてたばあさぬ、  
 櫓かいのちかふおとろへて  
 ゆふ日と共にしづみ行き、  
 寐釋迦のかしふにたそがれの  
 雲立ちわたる頃までも、  
 このおやぢめがふつくくと

ばやきあがふの念佛は、  
 たゆるひまこそ無かりけれ。  
 或日、おやぢは樂みの  
 徳利つぎかへ飲みほして、  
 あはもの足ふぬ酒の香かの  
 酔ひはあせたる水ぐるま、  
 めぐりめぐりぬ不興ふきようさに  
 身を投げ入れし床とこのうち、  
 つかれをのぼす腰ゆみの  
 甲斐あさぬふりむさばれど、  
 いともいささときさ夜よあかに、



しばくさむるまぼろしの  
 まあこを上げてうかへば、  
 やれ窓うがつぬば玉の  
 月かけ低き青柳や、  
 青き光に靡きつゝ  
 紅だ葉のそよぐあふあくに、  
 ーさては、この程落ちそめし  
 秋田の水かさまさりてや  
 清きこの瀬にさわぐむ。  
 さりどて、斯る水音は、  
 この年つきを住みおれし  
 わが身にさへもいぶかしと、

西のむしろ戸おし明けて  
 暗き樹かげにいで立てば、  
 ゆふべつあざしわが舟の  
 いつしか解けて、川瀬をば  
 流れの葦のそよくと、  
 吹かれてたわむ腰ぼその  
 龍女のみこと乗りたまひ、  
 すがる櫂さへおのづかふ  
 聲するかたに傾むきて、  
 ひそかに仰ぐ人間の  
 ありとも知らず、ひたすゝに  
 聴きはれ玉ふその聲は

まさしく笛のひびきあり、

「二十三夜は三日月の

でも夜中の黒き空、

光を圍むかざろひの

屏風岩かもみち飲んで、

しろがねちがす浪の上。

あかくうつろふ久方の

弘誓の舟に、玉かつぶ

千葉のかつぶのさを立て、

寐釋迦のすめるみすがたを

夜すがふまもる川姫よ。

龍の都の流れにも、

斯る貴とき瀬やはある。

龍の都の川瀬にも、

斯る清けき淵やある。

夜風にかをるさいあみの

花はくだけて散りゆけど、

また咲きそろふそのひまの

よどみ深めてます鏡、

みすがたのみはとこじへに

佛の御國照らすあり。

夜ちく之をもり玉ふ  
いましのつとめかしこしや。



樹だちをまもる山彦の  
 われはうぶやみうぶやみて、  
 あこがれいづるわが魂を  
 この月かげに歌ふあり。  
 あこがれいづるわが身をば、  
 このみひかりに掠むあり。  
 かくしも遠く聴ゆ来る  
 その笛のねに引かれつゝ、  
 ともべに立てる川姫の  
 神はかのづと下たり行く。  
 流れましろきしろがねの

岸の葦間をおし分けて、  
 このおやじめの見ゆがくれ  
 あど追ひせむとするあべに、  
 谷かげ暗きむかつ尾の  
 高さどころゆこゑありて。  
 「姫よ、いづこへ、笛のねの  
 ゆしは尾のへのこゝにあり。  
 天のつるぎの亦も飲けて  
 御空かすむる月かげに、  
 わが持つ斧とその音を  
 射おくる弓のかたちもて、  
 樹かげをまもる山彦の

神とぞわれを知りねかし。  
 草木も眠るうし満の  
 今はいましと吾を置きて、  
 この天地の静けさを  
 領する神のあるべしや。  
 ちが川水のひいきだに  
 といめ玉は、まのあたり、  
 しづみかへふむ北極の  
 星をも碎くかたかふじ。  
 いかにふたりは今こゝに  
 そのもち物を取りかへて、  
 ともにあふはぬいとあみを

しばしが間こゝろ見む。」

「そはこゝろ行くことあがふ、  
 わが眷屬はかしあづて  
 みち底かづくその鱈の、  
 葦間あづそふみぎはをば  
 離れがたきをいかにせむ。」

「さふば、佛のみ手に乗り、  
 わがかたよりぞ山たづの  
 迎へにまゐり候はむ。  
 しばし待ちね」といひ敢へず、



まこと寐釋迦のたゞむきの  
 動くと見るや、忽ちに  
 大なるみ手の延びいで、  
 山の御神はおのづかふ  
 川ばたにこそくだりけれ。  
 ことに、み神は川姫の  
 わたし玉へるみちれ掉  
 昔は願ふは、舟の  
 うつり玉へば、川姫は  
 山つみよりぞ受け取りし  
 斧と弓とをたばさみて、  
 仰ぐ佛のたをどる

廣きまゝかたに立ちたまひ。

「さうば、山彦、さりあがら、

長鳴鳥ながなきのあゝ時は

浮世の人の目もさめて、

見つけられむもはかふれじ。

もしも然らば身づかふの

歸へらむ道を失ふへば、

かれらのさめぬ間のみ

あがみち棹にころして、

まもり玉へといふまへに

次第にちゝむみ手につれ、

さかのぼり行く川水は、

さあがふ虹の掛<sup>か</sup>け橋を  
天<sup>てん</sup>にわたすに似たりけり。

おやぢはもとの樹かげより  
いきを殺ろしてうかいひつ。

「こはおも白し、おもしろ」と  
心のうちに思へふく、

「おのが年ごろあれ來たり、

はとく倦<sup>う</sup>みしわざをしも

斯<sup>か</sup>くめづらしみ喜びて、

空しく立てる山彦の

時を忘れてあれよかし。

やがて庭鳥うたひちば、

迷ひ來ふむ川姫を

かれもろ共にうちすゑて、

ことわり無くしわが舟を

つかふ神ども懲<sup>こ</sup>ふさむ」と、

ふとき両手をいははあす

かたく握ぎりて待ちうけぬ。

斯ども知ふで山彦の

神は言葉を違へつゝ、

早や鳴きわたる久方の

一番どりに驚きて、



三日月のべを早川の

行くゑに迷ふいさゝふね。

かやぢは得たりかしこしと

綱うちかけて引きよせば、

「いましはこゝをまもるてふ

おきあふん」と問ひたまふ。

「しかり、おきあは神邊もの

いと淺ましき戯ふれを

近く見きゝぞしてありき。」

「あはれ、さりとはしる露の

こぼれて落つるをかしさよ。

おだもたわりの小萩より、

たとへ散りてもとこしへに

残らむものを、千はや振る

神のこゝろは人間の

計り知るべきものあふじ。

たゞわが爲めに、かの姫を

このうつし世のはとりまで

迎へ來たふば、まのあたり、

のぞみの物を賜はふむ。」

斯と聽くよりおやぢめは

とくかは色を和らげつ。

「さふば御言に従ひて、

神々の日々にさこしめす

うま酒をこそたまはふめ。  
 まこと、おきあはこのゆふべ  
 飲みにし酒の足ふあくに、  
 いのちあかばをちうの實みの  
 ちいめふれけむこちしで、  
 この小夜中に至りても  
 まどろみがての折かふに、  
 いまし見てしをかりそめの  
 心やりともあさむ爲め、  
 姫もろ共にうちすゑて  
 せめ懲おとふさむとおもひしは、  
 このおきあめのあやまちぞ。

許し玉へ」とかしこみぬ。

「いましが酒をたしむとて、  
 神も然りと思ふこそ  
 世の人々のたぐひあれ。  
 神にはたしき絶たてあし。  
 強しいて望みとあるあふば、  
 この滴したを手に結び、  
 一くち飲みて行きねかし。」  
 斯くのたまひて山彦の  
 み手ある權をさしいだす、  
 その矢さきをばふりさけて



おやぢはまたも不興げに、  
 「こはわが日々になばあさぬ  
 みちれ棹あり。とく返へせ。  
 返へし玉へ」とのとしりぬ。  
 「いさ、心して見よかし」と  
 あはつき出すよく見れば、  
 「こはそも如何に—細棹の  
 竹とおもひしふしぐは、  
 こがねの輪もて矯められて  
 ひかりを放つ玉かつふ、  
 絶えて世にあさかをりさへ  
 したる露にをしまれつ。

一掬之を飲みほせば、  
 またよくひまに全身の  
 血もやをどふん味を知り。  
 二たび飲めば、その昔  
 別れし妻やわが子分の  
 淨土に招く聲を聴き。  
 三たびは、かれもわだつみの  
 龍宮に遊ぶこちしつ。  
 かいめる腰もおのづかふ  
 のびしが如くかるふかに、  
 かの川姫を足引の  
 山かげうとき谷間より

かのが背<sup>せ</sup>あかに迎へ来て、  
前後も知<sup>し</sup>らず酔ひ伏しぬ。

「あはれ、老いたる人の子よ。

安く眠りて、けふもまた、

かのがつとめに目さめよ」と

祝<sup>いわ</sup>するこゑともろ共に、

二つの神は玉の緒の

短きかけをかき消<sup>け</sup>して、

この世の外に歸へりけり。

\* \* \* \* \*

やがて庭鳥鳴き盡し、

いつしか月もとわたりて、

あかばし<sup>あ</sup>けしあけぼのや

泊<sup>とど</sup>美蘭<sup>らん</sup>いろの朝づく日。

ひかつ岸べに旅人の

呼<sup>よ</sup>ばふ風より驚<sup>おど</sup>きさて、

葦<sup>あし</sup>の水際<sup>みぎは</sup>に目をさます、

おやぢはいども寂しげに

舟<sup>ふね</sup>の綱<sup>つな</sup>手を解<sup>と</sup>きとめぬ。





つゆ霜

西行庵。

あしたの野べを行く時は  
われ踏まざるにかすみ立ち、  
ゆふべの空をさがしれば  
われ追はざるに星ぞ飛ぶ。

このあめ地のふは御むね  
はかりがたき世の中を、  
假りのすがたによそはひて  
まよひしふせぐ花のかげ。

心の内の彌百土よし  
築きあげたるこの根城、  
いのちのあふん限りをば  
抜くに抜かれぬそのぞみ。

やがて嵐の吹き去りて、  
あはれ、残ふん一ひふの

かをるかをりにうち乗りて、  
魂たまはいづこに歸りけむ。

秋風。

鳥が鳴くてふ吾妻ある  
みちのく山に咲きにけむ、  
こがねを鍛きたふ白河の  
關の清水のひらきにて、  
とぎ立てふれし「時」の鎌かま。  
目にはさやかに見ねども、

龍田の神はみ手にして・  
あたりを拂ふ、萬物の  
枯れ行くあはれを虫のねに  
しのぶはひとり賑にぎはひつ。  
憂きを重ねるわが身には、  
こゝもうまいの宿として  
ゆめ見に堪へぬみの笠を、  
吹き通すふむ秋かせの  
故郷戀しまる木橋。



盛春の歌。

君よ、汲ますや、春の酒。

にはふ霞のいや濃さに、

あまつ御空も酔へるあり。

汲めや、汲りや、再び

若き時は来ふす。

君よ、汲ますや、春の酒。

櫻の雲は地に満ちて、

人の心に戀浮ぶ。

酔へや、酔へや、再び

若き時は来ふす。

楽しきけふの魂たましいの

ありがを問はひ、答へてん。

花より花の上うへありと。

歌へ、歌へ、再び

若き時は来ふす。

雨もいとほじ、風も吹け。

花のいのちにあすあふば、  
われも香に咲く夢を見ん。

舞へよ、舞へよ、再び  
若き時は来らず。



春の思。

三十二年、盛春の頃、都なる上見の暮に詣で、大津に来るや、長  
等山高観音の樹は盛りなりき。東西の離隔を思ひ、過去未來  
の接續を想ふ。隱顯の思想花上を渡り行きて、遂に究むべから  
ざるなり。

花より覺むる曉の  
風につきせぬ香を傳へ、  
花に酔ひ伏すゆふぐれの  
鐘より遠き聲を聴く。

佛の御法まのあたり



浮ぶに似たるきのふけふ、  
罪と報いはいまだしも、  
こゝろは消えて春の雨。

静けき道を観ずれば、

暗き世界の現はれて、

楽しくつゞきあめ地は

あか児が笑ふおもてかも

生には死あり、死には又

いのちの影のつき添ひて、

春の思はうつせみの

限をいでよ、限にぞ入る。

夏野にて。

限りも知らぬあめ地の

ひろき野中をさまよへば、

おもひは浮ぶ白雲の

千々にくだけてあま飛ぶや、

軽きわが身のふる里は、

過去か然らず、來世かあらず。

みどりあまねきすい風の

つきせぬいのち呼吸して、  
 人間遂に朽ち果てず。  
 樹だちのうちに一すぢの  
 道を見とめて踏み行けば、  
 一あし毎に草の葉の  
 白露散ってこゑも無し。

### 茄子賣。

正午の背の中空高く  
 とまゝりしこがねの鳥からす

かゝやきの羽がひ廣げて  
 塵の世をいだき籠めけん。  
 窓のべの南も吹かで、  
 蒸しのぼるうち水あつし。  
 玉ぼこの道はかわきて、  
 遊ぶ子のかげだに見えず。  
 かきかぞふ十二の鐘も  
 鳴りやみし辻をめぐりて、  
 たゞくど過ぎ行くおきき、  
 老いかゝむ腰をのばしつ。



まへうしろ二つの籠に  
取る歳をしはしおろして、  
その蒴子なすびよび賣る聲も  
しきびたり、軒の下かげ。

常世にも我はあり。

日は出でよ、

日は沈む。

みそふにも

海の水、

うみ邊にも

そふの色。

みどりの野ふはありとて、  
いづれかおのが家あふぬ。

鱒あくば、

この手あり。

羽根あくば、

このころ。

天下てんかは石をまろばして、  
といまるどころ是れ立ちど。

憂世には、

坂もあり。

坂あふば、

雲懸かる。

櫻の花のあさ風に

散りても浮ぶいのちかき。

ゆふ暮に

眠る身を、

夢とこそ

人はいへ、

とこそ世にも

我はあり。

磐城の山中にて。

里遠き荒山中に、

横たはる道はわかれて、

二またの小枝にとまる

ひよ鳥の羽根あふねども。

あし引の嵐にあやむ、

みの笠をゆ手にささへて、

うち振ふ心の腰を



かたはふの石にやすめつ。

世の人の絶えしひろ野ゆ  
 仰ぎ見るみそふを暗み、  
 みちのくの旅のちぐさに、  
 しろたへの花舞ひ下たる。  
 うす雲はい行きかさあり、  
 くる雲は乱れちぎれつ。  
 奈落まで吹き入る風を、  
 あまつ日の聲とも聽かん。

みひかりは深く隠れて、  
 旅人の身をば照ふさず、  
 追ひ分けのしるしうもれて、  
 ゆくてをば示めすものなし。  
 ゆふ暮の寒さおぼへて、  
 たゞひとり立ちしあがれば、  
 その跡もつひに残らず—  
 踏み迷ふおのがかげのみ。  
 一つふにふりも積もりし、  
 おは雪のきよきみたまよ。

願くはわれを救ひて、  
久かたのあめに負ひ行け。

鶯の歌。

浮世のわざにくづはれて  
空しくあやむ人々よ、  
清水流るゝいその上  
布留野のあした、とく覺めて、  
行くての道も薄雲の  
霞にかける鸛を見よ。

遠く輝く黄金の  
羽根うち振ふ度毎に、  
眼をめぐるわが夢の  
八重の輪かざりふり落ちて、  
一輪くに照り出づる  
清きよはひに、岩づきの  
また若返へる光あり。  
げにや、この鳥、飛びやみて、  
荒山中の岩が根の  
こいしき上にとまるとも、  
廣野における白露の  
いろに洗ひしいきはひは、



草木を孕む満月の  
みづくしくも滴りて。  
晴れのいくさに出づる時、  
ますく猛雄がたばさみの  
弓矢のちかふ引き矯むる、  
その羽がひこそ一うちに  
千ざとの風ときほふらめ。  
あはれ、けだかさ山鷲の  
雲井にすぐふ住家には、  
つきせぬいのち湧き出でく  
鳥のはね身を淨むり。

乙女。

花の世界をわがものに、  
笑める心の流れには、  
あさけの影はうつれども。  
月の世界をわがものに、  
つとめる胸の深みには、  
戀のすがたはやとれども。

浮世の嵐むら雲を

わが乙女子は身に避けて、

あま津みかみのふどころに。

かのをさあ子の玉を得て

めづるが如く、やわふかに、

清さいのちを抱きつゝ。

わが稚き弟を残して

母の身まがおりし時。

菜の葉の床とこに生れあは、

彌生の空のすやくと、

ゆめ見もかろき胡蝶の身。

あしたの露にそだちあは、

野もせの風に抱いだかれて、

やがてかをふむ百合の花。



あまつ御神のみどり子は

清く優しき姿して、

世の常なきを語らはず。

亡せにし母の枕邊に、

夢か、うつろか、麗はしく

何を思ひむむその思がほ。

失戀の人にかわりて。

去年の彌生の花さかり、

ゆかしの君しいましをば、

身をすみ染の墨ころも

着て厭はじと、わが園の

たのしき末を語らひて、

別れしものを。この春の

聲なき嵐つれなきや。

都をあとに來て見れば、

わが手のうちの山川の  
 けしきに散りし花一ひふ、  
 名残の夢に迷ふわが心。  
 また來ん歳はありあがふ、  
 去て歸らぬ川かみに  
 ゑめる姿は浮ぶ時をし。  
 花咲けば花のかけ、  
 花散れば花のうへ、  
 五尺のかただの置きどころ、  
 とはに乱れんわが思ひ。  
 こひしき君の面影は  
 春のかそりと消ゆ行きて、

あふ、消ゆ行きて、  
 今はいづくをふる里にせん。

無花果の落るを見て、

世の終を觀す。

風も静に、足引の  
 片山里のいちじくや、  
 花見ゆすして結ぶ實の  
 落る夕べを身に受けて、  
 この世の終まぢり觀すれば



月日も光失ひて、  
 赤く熟<sup>じやく</sup>せし星々も  
 もろく流れて、紫の  
 しり尾に光る稻妻や、  
 西に東に鳴神の  
 ひいきあまねき天が下。  
 北に南に地の上の  
 諸族<sup>しよぞく</sup>の歎きつもしり来て、  
 高き山根も之が爲め  
 震ひし動くそが中に、  
 田を耕せし兩人<sup>りやうにん</sup>の  
 一人は先に引き取られ、

共に白ひくをみち子の  
 一人は後に残るとも、  
 いづれかわらぬ空蟬の  
 末はあめ地二つあし。  
 かのいにしへのエルサレム、  
 淨き御城<sup>みしろ</sup>の一夜<sup>よ</sup>さに  
 滅ばされけん跡のごと、  
 一つの石も石の上に  
 全くはあふぬばかりかは。  
 よろづの物の失せ去りて、  
 塵もといめぬ日こそ来め。  
 たゞ是れ人の死によりて

魂たまの世界を開くごと、  
 神のちかふと勢ひは  
 斯る中にもうつろはで、  
 來ふん御代の山かげや、  
 あふたの枝に柔なふかの  
 若葉含めて、やがて又、  
 夏の近きを示すふん、  
 嗚呼、われ爰にもの思へば、  
 てん地おのづと一轉し、  
 その影のみを現はさず。

移り行く世。

うつり行く世を故郷の  
 ふりしひてふに譬ふれば、  
 その幹ふとく生ひ立ちて  
 御空の風を凌ぎつゝ。  
 四方にひろがる大枝の  
 繁さ思ひは増されども、  
 曾てその根に戯れの



夢さへ今は歸り來ず。

竹馬たけうまの友の彼此かれこれの

西に東に隔りて、

日をし營かひさま見れば、

人の命も秋にして。

前も後ろも黄きある葉の

散り敷しく上に、この夕べ、

ひとりたゝすむわれは早や

二十歳はたごせあまり老いにけり。

某嬢に贈る。

あゝ、わが友よ、春の日に

こゝろ動うけは、花を見よ。

その香かはしき色も香かも、

曾て浮世のものさふす。

あゝ、わが友よ、夏の夜に

風待かぜち詫わびば、水を聴きけ。

流れくくて行く聲こゑの、

遂に愛ひを語らはず。

あゝ、わが友よ、秋ふけて

悲しき時は、月に泣け。

圓き鏡の輝きて、

をんちの操みさばいや高し。

あゝ、わが友よ、冬されば、

寂しき雪を思へかし。

野山の末もつゝまれて、

をんちの情けいや深し。

猪苗代湖。

口には何をも

岩代いわしろの國、

つゝめる心の

深みあるふん。

てん地も静かに

こゝに湯ゆあみす。

猪苗代のうみ、



浮世の外に、

延びでし松かけ

清き水中ゆ、

肌へをぬぐひて

われはいで来つ。

岩根に干したる

わが旅ころも

再びまとへば、

磐梯山の

いたいさばかりぞ

あとにしづける。

その水面にのぞみ

たいほふ笑めば、

涼しき羽風に

松の葉散りて、

いち輪の輪より

われは乱れぬ。

水鳴灘を渡りて。

霧に漕ぎ出でし

玉島沖の、

北に捲き上ぐる

帆ばしう高み、

あを空の海に

かざ枕かき。

うき寐のまきこも

いよく覺めて、

星の林をば

縫ひ行く舟の、

旅どろも寒さ

島々のかけ、

船頭せんとうの歌も

既に四五町、

ともべにさやげる

しう浪の音、

いち文字いちもんじに引く

早潮の筋。

しるく横たはる

水嶋灘の、

いといあふき瀬に

浮ぶわが身も、

名だるるく上げか



朝顔。

舟の月影。

傾城の姿に似たる、

こころゆかしき朝顔や、

きぬぐの恨残して、

垣根にすがる蜂の腰。

あかつきの風に吹かれて、

あやの眞袖や寒かふん。

わが夢は一夜に覺めて、

たい瞬間しんかんのうす化粧。

あかね刺す、日も出でるに、

如何ある虹の現はれし。

しる露の色にはあふで、

見よや、くれきの輪を開く。

あはれ、この花の口々に、

戀のまことを染め出でよ、

百年ひゃくねんのいのちもつひに

消えて惜まぬ風情かき。

岸の藤なみ。

昔の流れ悠々と、

名残とひびる岸の松、

千どせの上はひ満たしてや、

いまあま登るたつのごと。

雲は呼ばねど、水煙は

起さされども、むらさきの

藤をみ高しそのいさはひ。

ひそむ神もやをさるふむ。

まが淵深し深みどり、

あやあすうへを越ねかねて、

あはれを知らぬあはれし時

權よこたへて仰ぐあり。

こそねの指輪。

「たふちねの母は」と問へば、

めの子はあどをふり向きて、



「この家のわが屋のうちに  
居まし玉ふ」と答へけり。

傾ける 賤が軒端に、

ゆふげものすと 焚き立つる

けふりより、 きは定めあき

いのちの末や 争へる。

「ちよの實の父は」と問へば、

あまつ御空を 指さして、

「かしてある 清き御園に  
旅し行けり」と答へつゝ。

いと細き くすり指より、

こがねの指輪 ぬき取りつ。

「その折に 之をたまひて、

「あとより来よ」とのたまひぬ。

「さればこそ、 母ともろ共、

逢ふべき日をば 待つあれ」と、

もの語る その者よりも、

もれ聴く人の 心かき。

げにあはれ、牧師のやもめ、

おのがひとりを守りつゝ、

たまちはふ 神をあがむる  
讚美の歌も 怠らず。

日曜の 夕べにつとふ

祈いのりの家を 歸へるさに、

ともあへる その子の指の

輝く見ゆる 常ありき。



自作「月中亦」なる

浪子の戀を思ひ出て。

江戸の紫 阿波の藍

そまる色こそ深み草、

深きうれひの瀬にいでよ、

ゆるぐ浪子のいま更に

ちげかむとて甲斐を無み。

あゝ、神よ、美みの神よ、

かのヨブの昔のそれあふで、



家代々（たしろ）につたはりし  
 やまひは、あはれ、罪知ふぬ  
 乙女ひとり（おんなひとり）の得のがれぬ。  
 花はうつろひ、もみぢ散る、  
 うつせみの世の定めなき  
 さだめとこそはあきふめて、  
 いのち一つを人の爲め  
 世の爲め（よの爲め）のみに誓（ちか）へれど、  
 すぎ行く水のたへかねて  
 心は、知ふず迷ひけるかき。

月夜物語。

秋の夜深き（あきのよ）中空（なかつら）に  
 うまれ出けむ須臾（しゆん）の月、  
 照（あ）らすひかりに湯あみして  
 みや人着るか松の風。

ねいろも白きしろがねの  
 波にやかよふ物がたふり、  
 誰れとたふむ山高み、

むかしちがふの一の谷。

二の谷さへもさねぐて、  
あざさくまあく残れども、  
連銭あし毛にまたがりて  
落ち行く人のかげ見ぬす。

十萬餘騎のつは者も  
島の千鳥と散り行きて、  
かくれし船の行ゑだに  
今はいづこに迷ふらむ。

多年の榮華一朝に  
空しくありしあと問へば、  
いさむ源氏の白旗も  
ひと夜の夢にたゞよひて。

追はれしものも追ひし身も  
あそき光のかげにして、  
院の宣旨にあびさけむ  
たま藻ひろはむ、あまの子よ。  
おれもむかしはころも手の  
真弓つき弓かたにして、



名を顯はせしめます雄の  
 血すぢあるふむ、そのすがた。  
 やさしきむねのます鏡、  
 みるめのそでにおく露の  
 塵にまみれで、おのづかふ、  
 人のまことはかゝやまつ。  
 あはれ、わが身も憂きことの  
 つもりつもりてみ山あす、  
 おもきたび寐のつれぐに  
 いにし人ふをしのぶあり。

さあ歎げかひと、さうがにの  
 いとも貴とさ乙女子よ。  
 花にあふしの襲ひ来て、  
 玉はあさ瀬に得がたくに。  
 屋島のゆふ日くれあわの  
 散ふふ末廣名のみにて、  
 壇の浦わの底あくも  
 しづみ果つふむ世にしあれば。  
 わが盛衰はとこしへの

海に浮べむ月の夜や、  
雲かのづかゝ退きて、  
平家追討 萬古ばんこやむ。

小督。

あゝ柴の  
馴れしたま手に弾く琴は  
秋の夜さゆる月のこゑ。

峰のあふしも  
松吹くかせも

いとゞしづみて、しみぐと  
昔しをしのぶかたをり戸、  
かた敷くそでの  
つゆこそやどれ。

照りまさる

月毛の駒にむちうちて、  
雲井はるかにうへ人の

つふき迎へに  
ほだされてかも、

またつちがれし玉の緒の  
ほそきいのちは、かけまくも



あやにかしこき  
御門みかどのものを。

負おひ征そ矢やの

そよども聴かぬよそ人に、  
相あもたふれしきぬぐの

うふみは、あはれ

をみあの果はか。

宿世のちぎり斯くまで、

押し着せふれしすみ染の

うふひる返へせ、

いまだそまふす。

くれあゐの

あかき心はつふみかね、

もろきあみだの小夜さよまぐら、

しのびくして

まがきのほどり

仲國の手にみち引かれー

引かれ来たまふあみがさは、

まさしく君と

いまおぼへしに。

それもまた、

みちゆめの世のゆめあれや。

嗟峨のいほりのたゞひとり、

さめてさびしま

あかつきの鉦。

抹香のけふり一すぢに

浮世をよそのつとめこそ、

いまはその身の

ちかふあるふめ。

吾妻山雑詠。

明治二十六年六月、吾妻山再び破裂す。余行て之に登る、奇観實にいふべからず。頂上に於て、偶々床しき外國人の旅行者に遇ふ。相共に旅思を語て東西に別れしが、下山の途次、再び谷川の片岨に會す。さらばの生ずるはひとり、清水の落つる蔭、情眷々として又相別るゝに忍びず。遂に數里の道を福島停車場迄見送りぬ。のも所感を詠して此六篇となる。

(一) 山を望みて。

残月いまだ隠れず、

かげかすかの吾妻山、



まださの蚊屋離れず。  
眠ふげ拂ふへかすみ散。

朝け浅く、ほのぼの

捲きぞあけし世の御簾。

さがめ遠きしう雲の

けふりいつこ、ほとぎす。

露の道そり乗り

行けば、田の面民無く、

心ひとり小をとり、

駒涼しくいな鳴く。

(二) 高湯にて。

やぶれし沓にあし引の

山又山とふみ蹴りて、

胸より高くそば立ちの

山又山を抱きつゝ。

もゆる日かけを背に負ひて

片唄をつたふあを蛇の、

油のあせのおも荷をば

宿のいで湯に洗ひ去り。

遠くたを引く夕暮の  
 心に浮ぶ高きのや、  
 欄干近く圍む碁の  
 あや目もわかずあり行まつら  
 ひとり伏戸に入る夢の  
 世界はいとどい輕けれど、  
 覺ひればもとの戀にして、  
 憂きに沈める旅路かま。

(三) 細谷川。

麓をまどふぬば玉の

夜霧の上に輝きて、

曾ていねざる谷川よ。

草木静けき頂の

月に岩間をかすめつら、

そのかみ若き山姫の

姿見ゆけん水かゝみ、

千々に碎けて白がねの

光を流すその末は、

限も知らぬ天津空

いづこの國に至るらん。



(四) 烟の柱。

じかつ尾ゆ遠くのぞめば、  
 あを空をささるる柱。  
 やうくに近づき見れば、  
 奈落より噴き出すけふり。  
 隠れてしいきはひふとく  
 立ち昇る末は、はびこる  
 黒雲に、日を遮へざりて、  
 焦熱をくつ返べしけん。

岩が根の解けてふり積む

いたいさを踏みて、仰げば、  
 あふがねの地鳴り烈しく、  
 吹く風の柱撓ひて。

まのあたり空に飛びかふ  
 おは石のさしるひふめき、  
 いかづちと見まがふまでに  
 むふ肝は奪ひ去られつ。  
 われひとりわれを恐れて  
 かざ上にい避けめぐれば、  
 やすふかにそがむ氣ぞする

山つみの高さ姿を。

(五) 露の露。

瀧のしず糸を

岩まに懸けて、

いとよとやかある

観音菩薩、

すいませ玉はん

この山のかげ。

空気の流れに

肌へも透き透き、

そのいろ香深き

かぶくれあるの、

いちごの結べる

露のしたより。

浮世の塵には

いまだ染まらで、

わが手にうつさは

消ぬや失すとも、

清さを盡させぬ

いのちあるふん。



(六) とつ 國人に 別る。

はる ぐと

あみ路越に、

わが國に

遊ぶ君。

いち樹のかげの流れて、

相逢ふことの奇しさよ。

むすめ子を

ふたりつれ、

もろ共に

山のぼり、

見てし烟の宮はしと、

ふとしき立てる岩根より、

下るにも

おまじ路、

憩ふにも

一つ蔭。

いはぬいちこの色にさへ

人の誠は現はれて、

別るくに

別れかね、

停車場に

見送れば、

帽を脱ぎしは父おやよ、  
たゞはとゑむは姉の君。

そのあとに

行く人は、

みかはをば

あかふめぬ。



松嶋雑詠。

(一) 富山に登りて。

八百よろう

かぞへ盡せぬ松島は

如何ある神のうませけむ。

霞のころも、

みどりのかむり、岩もすそ、

こゝろぐに、着がざりて、



天地の

一つ血筋に歸らむと、

ともにあみ伏すおもてには、

秋の夜の

月の光ぞ照りまさむ、

數里の入江底清み。

しづま月

いにし人ふを奪ひけん

あがめ床しき夕暮に、

いと高さ

富山寺の鐘のねの

消ぬ行くわれも、そのわれも、

ゆく水の

絶えずありてふ天工こそ、

どこしへまでの詩の世界。

目のうちに

生きて動かむ氣のするは、

生きて動かむ氣のするは。

(二) 詩人と鶯。

いばふ踏み分け訪ひ來たる

人は絶えにしやま寺の、

さびしきうちにも思ふ

庭のも近く、うぐひすの

一こゑ二こゑ三こゑ 鳴く  
 聴きゆく時は、何ととも  
 ほとく わすれ、身にぞしむ。  
 そのねにいまの 我歌の  
 心はうたひ出でにけり。  
 羽根ある鳥も、無き人も、  
 まことおまじの 詩の神ゆ  
 たまを分ちしものゝごと。

(三) 富山に籠れる時、或夜、大風ありければ。

ひとりぬる 富山寺の 嵐聴けば、  
 身も波ぎはに 飛ぶやと思はゆ。

(四) 別後、寺僧に贈るとて。

詩の里を夢にゑがまて 見る毎に、  
 形はあがず 君が撞く鐘。

蟻に寄す。

よるづの物の 靈長と  
 はこり頼める 人々も、  
 時し來りて 死ぬる日は、  
 野山に曝ふす 白骨を